（別紙２）　　審査の結果の要旨

論文題目　　『近世都市騒擾の研究』　　氏名　岩田浩太郎

本論文は、近世中期の都市を素材として、民衆運動の歴史的特質を、とくに社会経済構造との関わりを中心に多面的に解明しようとするものである。まず総論において研究史と相対する本書の方法と課題がていねいに述べられたあと、本論は十の章と二つの補論が三部にわけて構成されている。

第一部「都市打ちこわしの世界像」は三つの章と二つの補論からなる。ここでは素材の中心を天明期の江戸打ちこわしに求めて、都市食糧蜂起の行動様式・意識・論理構造・世界像などが検討される（１・２章）。また打ちこわしの記録とそこにみられる叙述や政治意識の特質を、新たな記録史料の発掘とともに解明してゆく（3 章・補論１～２）。

第二部「構造変動と都市騒擾」では、17 世紀末～18 世紀末の江戸における都市経済の変容と都市騒擾の形成・展開との関係について考察を試みる。そこではまず、享保期の動向を高間伝兵衛打ちこわしに至る矛盾構造の解明という視点から追究し（４・５章）、また天明期の米穀売買勝手令の実施過程を精緻に辿りながら、江戸米穀市場の構造と、幕府政策の破綻への動向を検討する（6 章）。さらに 18 世紀全般における幕藩制経済の問題にも視野をひろげ、江戸・大坂・日光など諸国における都市騒擾の性格を包括的に論ずる（７章）。

第三部「地方都市騒擾の展開」では、明和期から文化年間にかけて展開した地方都市における個性的な民衆運動の事例を紹介し、その特質をみる。そこではまず明和年間の松山や富山、文化年間の下坂本における「戸〆（とじめ）」（閉店罷業）という小営業による特異な運動形態を紹介し、これを惣町一揆の一種として性格付ける。また天明期青森湊における食糧危機の中でみられた民衆による「米改め・蔵改め」（有産者によって隠匿された米穀の摘発）行動を明らかにし、これを米騒動型騒擾として意義づける。

本論文は、近年低迷している近世の一揆・民衆運動史研究の現状に対して、社会経済状況の分析を基礎とし、運動主体である民衆の行動様式や意識を包括的に捉え返すことで停滞を打破し、新たな方向性を提起しようとする意欲的なものである。とくに、天明期江戸の幕政の動向や社会状況を絡めた打ちこわしの研究は、一方で、新史料の紹介や新たな運動形態の発見など多くの知見をもたらし、一揆・打ちこわし研究の一つの達成と評価できる。そして、ヨーロッパなど諸外国の食糧蜂起事例との比較史的考察をも含むなど、学界に裨益するところ大である。

本論文は、19 世紀以降への言及が十分みられず、また内容構成のバランスなどに若干の難点をもつが、本審査委員会は、上記のような顕著な研究成果に鑑みて、本論文が博士（文学）に十分値するとの結論を得た。